



7 清水寺春雨図・宇治秋暁図 野村文挙

対幅

明治三十九年（一九〇六）

絹本着色

各一三八・三×七四・一

京都東山の清水寺は、崖に張り出した舞台造りの本堂でよく知られ、藤原俊忠が「けふこずば音羽の櫻いかにぞとみる人ごと」に問はまし物を」（新勅撰和歌集）と詠んだように、桜の名所としても古くから有名であった。こうした和歌の詩的なイメージをとまう桜にいろどられた清水寺の姿は、京都画壇の絵師を中心に繰り返し描かれた。また京都と奈良をつなぐ地点に位置する宇治は、その風光明媚な土地柄から天皇の離宮が設けられ、平安貴族たちが別業を営む土地であった。そして藤原道長の別業であった宇治院を、子の頼道が永承七年（一〇五二）に寺院としたのが平等院鳳凰堂である。浄土信仰に基づいて建てられた平等院鳳凰堂は、地上の極楽浄土を思わせる美しい景観をもつ名所として、清水寺とともに『都名所図会』をはじめとした江戸時代の名所図会に登場する。こちらも京都画壇の絵師たちが好んで描いた名所である。

本図を描いた野村文挙（一八五四～一九一〇）も、京都画壇の流れをくむ画家である。京都の呉服屋に生まれた文挙は、塩川文麟そして森寛斎に師事した後、明治十九年（一八八六）に京都から東京へ移住し、東京画壇の中で円山派を新たに展開した。本図にみられる、春のやわらかな雨に霞む清水寺の叙情的な表現は文挙のもっとも得意としたものであった。明治三十九年に霞ヶ関離宮装飾用として宮内省より制作を命じられた作品。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan